農業土木を支えてきた人々

大崎　連

——三ツ島干拓事業の完成——

福　田　光　博*

諫早湾周辺の干拓の歴史は古く，500 年も前から干拓事業が実施されており，これまでに約3400町歩が干拓されているといわれている。この干拓地の諫早市小野町に大化改新に始まるという条里地割の存在が認められ，幾筋もの堤防線が沖に向かっているのをみると，先達のすさまじい自然との戦いをみる思いである。諫早地方の平野は自然干陸あるいは干拓によって造成されたものが大部分で，埋津，鷲崎，黒崎，小野島，赤崎等のかつて海岸線や島であったことを物語る地名が残っている。図-1, 2 のように，堤防線の地盤標高によって干拓の時期が区分される。干拓方式も堤防線が沖に進むにつれて新しい技術が開発されている。元禄15年線までは，切羽に柴搦する堆土様式であったが，以後は松杭を 1 間置きにして竹や柴木で土もれを防ぐ方法が用いられた。安政 6 年線は諫早地方の干拓地に初めて石垣が使用され，その名も「石垣開」と名付けられている干拓地がある。

三ツ島干拓は諫早湾奥の南岸島原半島の吾妻町（昭和29年山田村と守山村が合併）および愛野町の地先にある約 300 町歩の干拓地である。三ツ島干拓の堤防線はさらに低い標高 −1.00 m 付近に設置されている。堤防の北西約 1 km 海上に，沖ノ島，中ノ島，大島と三つの島が浮んでいるので三ツ島干拓の名が付けられているのであろう。この三ツ島干拓に志を燃し，幾多の苦難を乗り越えて遂に完成させた人がいる。この人こそ干拓の父といわれている大崎　連であり，ここに紹介したい。

I.　大崎　連のおいたち

大崎　連は，安政 5 年（1858年）11月 3 日，山田村の庄屋林田儀左ヱ門基武の二男に生まれた。7 才から籃田先生塾において漢学を修め，明治 8 年17才で富豪大崎雪蔵の養子となっている。

この山田村は，すでに肥前風土記（713年＝和銅 6 年，元明天皇が編纂を命じた。）のなかに記録されている歴史的に古い地名である。肥前風土記によれば，山田，神代，野鳥，新居の四つの郷があって，とくに山田には驛所が設けられ，交通の要衝であったとある。驛は宿場のことで，驛馬（はゆま）5 頭を常備して通信交通に供していたと記されている。

林田家は御陣屋と称して，島原藩主が長崎港の警備に着任する時は，往復の宿泊地になっていた。島原藩の庄屋は，不都合なことがないかぎり世襲制であって，連の

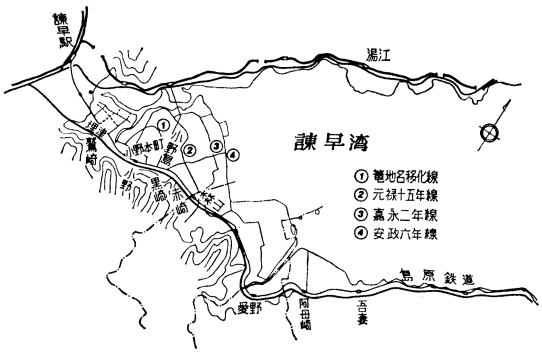

図-1　諫早湾周辺の干拓地

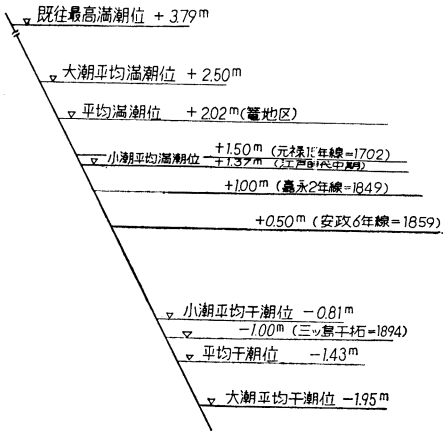

図-2　諫早湾潮位と堤防線

*　長崎県島原振興局農林部（ふくだ　みつひろ）

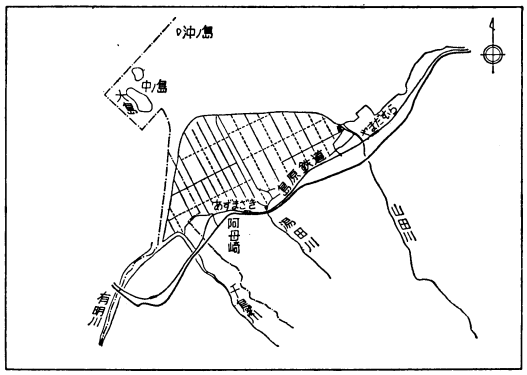

図-3　三ツ島干拓平面図

父林田基武は48代目の庄屋であった。また，富豪大崎家は大地主であった。天保7～8年(1836～1837)の大凶作の時に庄屋は藩庁の許可を受け郷倉の米を放出したが，それでも足らなかった。その村民の苦境をみるに忍びず，大崎家の祖先は自から穀倉を開放し窮民を助けた。おかげで餓死者を村民から出さずに済んだ。この時の恩義があったので，基武はこの養子縁組を承諾したといわれている。

大崎　連は29才で，3代目の戸長に選ばれ，明治21年4月に市町村制が公布されると翌年の明治22年に，32才の若さで人格と力量を認められ山田村の初代村長に選ばれている。明治33年4月に村長を辞退しているが，その前後15年余を村会議員を6期務め，山田村発足当時の建設期の首脳として活躍した。連は，村長就任前から村民の幸せと生活の安定を願った生涯の大事業として干拓による農地拡張の計画を進めていたが，ついに明治26年9月19日，300町歩の干拓県令を受け，同27年5月5日，夢であった三ツ島干拓の大事業に着手したのである。

II.　当時の山田村

明治25年に南高来郡長であった金井俊行氏が郡内各町村を調査した記録によると，当時の山田村は戸数792戸，人口4,174人であった。農業関係の記録としては，農家が642戸，牛342頭，馬475頭，水田256町歩，畑381町歩，計637町歩の農地があり，農家1戸当りの経営面積は約1町程度で長崎県としては決して零細ではなかったが，しかし生産性の低い農業であった。ついでながら，このころは米一俵の値段が2円50銭程度であったそうである。

III.　干拓事業の動機

連が着手した300町歩の干拓事業は当時としては大事業であった。その当時の干拓事業といえば，実家林田家の別家阿母崎の乙名林田左ヱ門，理兵ヱの父子が天保，嘉永にかけて完成させた20町歩の干拓があった。また，明治6年には諫早家が明六開の37町や，明治16年に森山村長山崎謙茂が40町の干拓事業を完成させている。これらに比べれば規模においてはるかに大きな事業で，連が自からの財産を投げうってまで手がけたのはいかなる動機からであったろうか。

戸町，村長としての行政，政治経験豊富な連が眼前に広がる干潟をみて国土開発の意識を燃えたたせ，また，当時完成されていた干拓事業が彼に刺戟を与えたこともあったかも知れないが，しかし何といっても，連の村民の幸を願う心が一番の動機であった。

IV.　干拓事業の経過

明治26年9月19日，300町歩の埋立認可指令を受けた連は，翌27年5月5日いよいよ生涯をかけた干拓事業に着手した。この時の着工資本は大崎家の資産と愛野村の酒造地主の中尾忠吾，それに長崎市の松田源五郎の三人の資本であった。三ツ島干拓事業は，連が村長就任前からいろいろと計画を練って着工したのであったが，深い軟弱層は想像以上で，彼が頭で考えたとおりには工事は進行しなかった。しかし，多くの障害を乗り越え事業完成に向けて血のにじむような努力がされたのである。完成までには，事業主も大崎，新見，大倉と引継がれていった。事業主が変っても，連の指導者としての地位は，いささかも変るものではなかった。

連が最初に試みた堤防断面は概ね 図-4 のようなものであった。まず堤防予定線に杭を幅 5m 前後に2列に打込み，直径 30cm 位の大きさにたばねた粗朶を敷き詰め，その上に栗石を積んで沈下が安定したところで間知石空積を積上げた。石積裏の盛土は潟土で築立てた。しかし，空積のため潟土が潮流で流され何回も盛土工事を繰返さなければならなかった。難工事の末，明治28年

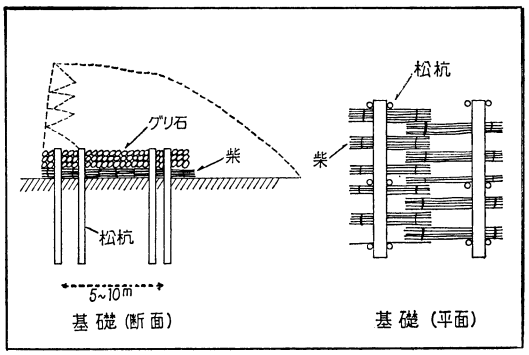

図-4　堤防断面図

写真-2 大崎 連翁

には8割程度完成したものの，築堤が急に沈下し，高潮の襲来で一夜にして崩れ去ってしまった。被災カ所の復旧に次ぐ復旧でやっと完了したかと思うと，暴風雨は容赦なく被害を与え，これまでの労力は水泡に帰した。明治39年には最後の潮止工にはいり完成へと向っていたが，潮止口における潮流や水圧は想像以上の困難を伴い犠牲者さえ出してしまった。さらに大自然はなおも試練をゆるめず，次いで起った暴風雨と高潮のためとうとう堤防は決壊してしまったのである。着工以来地主として大崎家の資産が動員されたのみならず，愛野村の酒造業兼地主の中尾忠吾や長崎市の松田源五郎も参加したのであったが，このように再三の失敗を重ね，ついに資金は底をつき大崎家の資金を使い果たしたばかりか，大崎家の親類縁者もこの干拓事業のために資産を失った者もでた。ここにおいて連は干拓の権利を鹿島組に譲渡し，鹿島組はさらに新見七之丞に譲った。明治40年ごろのことである。

新見七之丞は残工事に着工したが，堤防の裏をヤグラで囲み，丸太で壁を作り，そこに潟舟で潟土を運んだ。彼は，連よりも多くの資材を投じ早く完成させようとした。この残工事の仕様書には堤防の高さを満潮面から6～9尺までとするとあり，石積や栗石間の固結のため三和土が使用された。しかし潮止工には困難を極め，何度も閉塞を試みたが失敗，ここに新見七之丞は全工区を一度に完成させることは無理だと判断し，地区を二つの工区に分けて中央に中堤を築き，そこに潮止口を設けることにしたのである。中堤の築堤は外堤と間知石で積み，裏には粗朶を厚く敷き詰め，その上に山土をトロッコで運んで築造した。潮止口もヤグラ囲いにし，石積を干潮面から左右均等に積上げて裏に盛土を行う工法である。明治43年2月最後の潮止工が完成し，大崎 連が感激のあまり万歳しているのが **写真-2** である。しかし，この

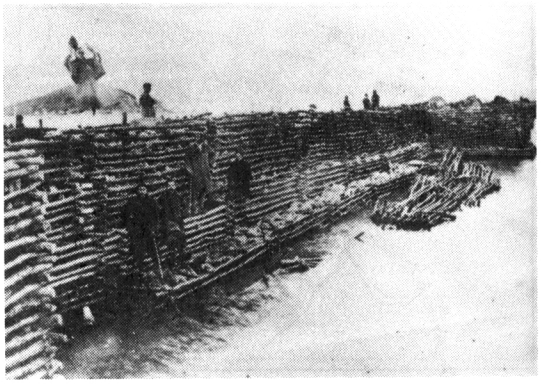

写真-2 明治43年2月，第一工区で最後の潮止工が完成し，大崎 連は，感激のあまり万歳をしている。

感激もつかの間，またもや，この地方を襲った強風は潮止カ所を決壊させてしまったのである。さしもの大崎 連も今度ばかりは干拓事業に見切りをつける時がきたと思ったそうである。そのころ，たまたま連の隣の大野勝平氏の家に来ていた佐賀の人に悩みを打明けたところ，佐賀の新開築きの名人といわれる伊藤兼助を紹介された。早速，連は伊藤兼助に被災現地の調査を依頼したところ，彼は潟スベリで調査し復旧は可能であるから初志を貫くよう連を説得したそうである。これに力を得た連は，東京の大倉久米馬に出資の依頼と請負師を変えてもらうため上京した。大倉久米馬は事態を察し大崎との面会を拒んだが，連は面会できるまでは島原へは帰らぬと玄関の土間に坐りこんで動かなかったという。

大倉久米馬は，遂に連の熱意に動かされて，自から資本家となり，工事請負師も伊藤兼助に変更して干拓事業は続行されることになったのである。このような経過をたどり，東を一工区，西を二工区として工事を再開した。伊藤兼助は残がいを取除き，人海戦術で独特の盛土

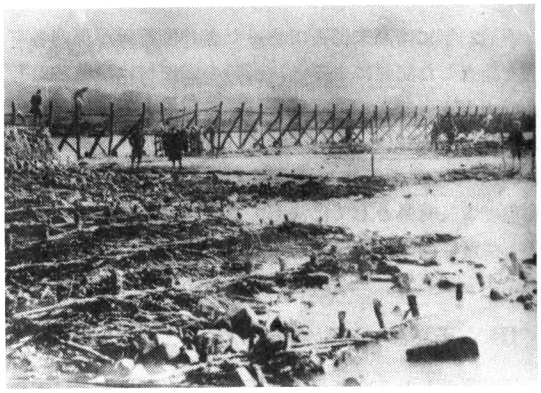

写真-3 やっと完成した堤防も台風によって決壊

工法を採用して築堤を行った。また，潮止工も土俵固めによって成功させた。これが大正5年である。

第二工区は第一工区完成後10年間放置されていたが，大正15年，佐賀県の弥富寛一が第二工区146町歩の埋立権を新見七之丞等から取得して，大正15年6月に耕地整理事業施工の許可を受け着工した。工事担当は佐賀県佐賀郡南川副村の北村栄太郎という人で，大正10年に川副村の大正搦(85町歩)を完成させている。築堤工事は第一工区の経験もあったのであまり問題なく進んだが，潮止工に手こずっている時，またもや昭和2年9月14日の高潮に見舞われた。第二工区の全堤が決潰し，第一工区も全堤にわたって石垣数段を残して全域が災害を受けた。

三ツ島干拓事業は，この昭和2年9月を期して新しい出発をすることになる。国庫補助で築堤防の高さは，16尺とし，それに4尺のパラペットを設けるよう改められている。こうして，第一工区は昭和3年に完了し植付けが行われるまでとなった。第二工区は潮止が難航し，昭和5年に完成した。かくて250町歩余の水田が造成され，山田村は一躍500町歩の水田を持つ県下有数の米の生産地となったのである。

大崎　連が明治27年に着工してから実に37年の歳月を費やし，この間，長崎市の松田源五郎，愛野村の中尾忠吾の協力を得たが，連は自からの資産を使い果たし，さらに新見七之丞，大倉久米馬に出資を求め遂に完成にこぎつけたのであった。これらの協力者たちは，不屈の精神で干拓事業に注ぐ連の熱意に感激し多額の資金を投入したのである。

V.　宮崎県における疎水事業

連は，三ツ島干拓事業を進めながら，明治27年宮崎県西諸県郡小林村大淀川の上流に疎水工事を実施している。7年の歳月を費やして60町歩の開田を行った。これが発端となって，地元民の投資により400町歩の開田が実現した。時の宮崎県知事は，連に感謝状と銀盃を贈り，地元の農家の人々は記念碑を村の一角に建て，現在でも感謝の的となっている。連氏の末っ子の吉田吹雪（長崎市在住）さんは，59年2月，小林村を訪れ，地元の方々に大歓迎を受け，父の偉業に接し深い感銘を受けたという。また，連は明治31年支那の青島貿易を開始し，石炭を送って満州の大豆粕を肥料として輸入し，米麦の増産を図ったが，日露の国交が急を告げ中止した。このように，連は企業家としても精力的に活躍したのである。

VI.　頌徳碑

三ツ島干拓事業が完成したころ，島原半島では新しい民謡が歌われていた。

山田ン　大崎さんは
才子こちゃ　才子よね
二百と六十町の　ヨイショ
新田きづくよね

私欲を捨て，村民の幸を願って幾多の困難を乗り越えて，三ツ島干拓事業を完成させた連に対して，村民が感謝の気持を，この民謡にこめたのであろう。こうして，山田村が県下有数の米穀生産地となり，大東亜戦争中や終戦後の食糧難に際し農民は増産に励み，国民を飢えから救った功績は大きい。連は，晩年において，川床の自邸を売り払い生涯をかけた新田の一角，舟津に小学校の廃屋の払い下げを受けて建設事業所兼住居を建築した。彼はここで，干拓地を眺めながら，過ぎし日の苦労を偲びつつ，さらに将来の山田村の農業発展を希望しながら，昭和4年11月15日村会議員のまま72才の生涯を閉じたのである。

いつも，木綿の着物しか着なかった連は朝夕の2回新田を一回りすることを日課とし，農作業の農民にやさしい声をかけることが何よりの楽しみであった。その連氏の偉大さを称えて，昭和25年，干拓地の一角の木立の中に，「大崎連翁之碑」と書かれた頌徳碑が建立された。毎年5月には，地区農民は遺徳を偲んでいる。

VII.　おわりに

現在，この干拓地は，山田地区県営圃場整備事業として，昭和48年度に着工し，昭和61年度に完成予定である。新たに，区画整理をはじめ，用水源の確保，地区内農道の整備，暗渠排水を実施し，さらにすぐれた圃場条件を整え，高能率の生産団地として，近代農業の新しい飛躍を始めている。先達がわれわれに残してくれた干拓事業の情熱は，現在にも受けつがれ，今また諫早港において，諫早湾防災総合干拓事業として大事業が始まろうとしている。

大崎　連の偉業を紹介したが，資料が少なく，ほとんど「山田村史」や「有明大干拓地区経済報告書」によった。また，連氏の末子の吉田吹雪さんにもいろいろお世話になった。紙面をお借りして感謝申し上げたい。

引用文献

1)　諫早市史編纂室：諫早市史，第二巻，(1955)
2)　渋江芋麿：山田村史，(1954)
3)　農林省熊本農地事務局：有明大干拓地区経済調査報告書，第二輯，(1959)
4)　高田雄之：干拓工学
5)　長崎県耕地課：長崎県の耕地事業，(1960.11)

〔1986.　5.　15.　受稿〕